

特集
「映像製作」という仕事
リポート
現場からの報告

朝生哲夫・秋山 嘉 ▶ 巻頭言「映像製作」という仕事
—現場からの報告—

間合 建介 ▶ 演出を学んだ場

シェークMハリス ▶ 短編映画「奇跡みたい」制作記録

川北ゆめぎ ▶ 映画「まなみ100%」に寄せて

—他人を頼るとのこと—

松原 龍弥 ▶ たた見つめる

左野 智樹 ▶ わたしの特撮体験記

鍋島 享裕 ▶ 変わりゆく撮影

大久保礼司 ▶ 映画の縁に導かれて

高槻 彰 ▶ AV監督として生きる

朝生 哲夫 ▶ 「製作部」そして「町場のディレクター」という仕事

連載

越境ポートレート・ギャラリー②

戦闘服を着る女性たち⑩

判例を読もう②⑨

「今日も劇場へ」⑥④

グラフィック

「万華鏡のような台湾」を知った旅



ジョエル・トマ、フィリップ・ヴァルテル校訂・現代仏語訳・注釈
『ルーオトリープ』——一世紀・ラテン語の民話
——『グラアルの物語』の先駆的作品

グルノーブル・ヴァル・アルプ大学出版局、二〇一四年

渡邊浩司
HIROSHI WATANABE

本誌「中央評論」二八八号（二〇一四年七月）所収「本の紹介」（「アーサーとマーリン」―四世紀・中英語の物語）でも触れたように、二十世紀末にフランスのグルノーブル大学出版局に「ヨーロッパ中世」というコレクションを立ち上げたのは、中世フランス文学の専門家フィリップ・ヴァルテル氏である。一九九六年に刊行が始まったこのコレクションの大半は、フランスで比較的知名度の低い中世ヨーロッパの文学作品の現代フランス語訳で占められており、中には原典を含む対訳版も何点が含まれている。その後、グルノーブル大学では学部統合が行われ、出版局の名前もグルノーブル・アルプ大学出版局（通称UGA）へと変わった。

だが、幸い「ヨーロッパ中世」コレクションは存続し、担当の任をヴァルテル氏からフルール・ウイニエロン氏（グルノーブル・アルプ大学教授）が引き継いでいる。

二〇一四年に入りこのコレクションに『ルーオトリープ』が加わった。中世ラテン語で書かれたこの作品の校訂および現代フランス語訳と注釈を担当したのは、ウエルギリウスを始めとしたラテン文学およびイマジネール全般を専門とするジョエル・トマ氏（ベルビニヤン大学名誉教授）と先述のフィリップ・ヴァルテル氏（グルノーブル・アルプ大学名誉教授）である。本書は、七世紀から一〇〇年までの簡略歴史年表と長大な「前書き」に続き、

「ルーオトリープ」のラテン語原文とその現代フランス語訳がページの左右に配置され、異本や脚注が添えられている。そして巻末には、「後書き」、作中に登場する「魚の語彙集」、「参考文献」、「目次」が順に収録されている。

『ルーオトリープ』を伝える主要写本は、ミュンヘンのバイエルン州立図書館が所蔵するCm一九四八六写本（通称M写本）であり、その筆写時期は一世紀と考えられている。ミュンヘンの南約五〇キロにあるテーゲルゼン修道院で一八〇三年に発見されたこの写本は、三十六葉（十八葉の表裏に詩行が記されたもの）からなり、断片をつなぎあわせたものである。この他に

シュメラアの校訂本は一八三八年に、フリードリヒ・ザイラーの校訂本は一八八二年に刊行されており、現代ドイツ語訳は早くも一八九七年に出されている。なお一九八五年にベネディクト・コンラート・ヴォルマンが校訂した最新版はインターネットで閲覧可能である。こうした複数の校訂本の中で、トマ氏とヴァルテル氏が現代フランス語訳を行うにあたって底本としたのは、一九五九年にノースカロライナ大学出版局から刊行されたエドウィン・ロ・ズィーデルの校訂本であり、適宜他の校訂本も参照している。

一八三〇年にオーストリアのザンクトプロリアンで発見された二葉（二葉の表裏に計一四〇行が記されたもの）が同機関図書館に保存されているが、これはM写本を転写したものだと思われる。また一九八一年にはM写本の溝にあたる部分（計十四行が記された断片）が見つかっているため、現存する『ルーオトリープ』は計三二二八行、長さの異なる十八の断片からなっている（六二二行からなる断片五が最大で、二十四行を数える断片九が最小）。欠落部分が二九四行と推定されることから、完結したと思われるこの作品の長さは三六〇〇行ほどだったはずである。

に通過していたと思われる。ラテン語で書かれたこの作品の中にはドイツ語や、あるいはドイツ語からの借用語が認められるばかりか、主人公ルーオトリープのほか、イムンヒ、ハルトウンヒといったドイツ語名が出てくることから、作者の文化的背景が推察される。M写本は作者自身が口述筆記させたものだと考えられるため、『ルーオトリープ』の創作年代は一世紀後半、つまり神聖ローマ帝国ハインリヒ四世の治世（一〇五六―一〇六六年）にあたりと考えられる。それはローマ皇帝とローマ教皇との間で叙任権闘争が繰り返されてきた時期にあたり、ハインリヒ四世（皇帝）がグレゴリウス七世（教皇）に屈したカノッサの屈辱（一〇七七年）には特に有名である。

こうした作品の成立事情から、『ルーオトリープ』をめぐる研究はこれまでドイツ語圏を中心に進められてきた。作品校訂の歴史は一九世紀まで遡り、ヤーコプ・ケリムとアンドレアス・

作者はM写本が発見されたテーゲルゼン修道院の僧であると思われるが、その名は分かっていない。この修道院は八世紀半ばに創建されたベネディクト会系であり、『ルーオトリープ』の作者は作品の文体や語からラテン文学（ウエルギリウスやオウィディウスなど）

「ルーオトリープ」の現代英語訳はズィーデルの校訂本の中に対訳の形で見つかると、一九八四年と一九八五年には他の研究者による英訳も刊行されている。スペイン語訳は二〇〇二年、イタリア語訳は二〇〇三年に出ているため、今回のフランス語訳はこれまでの空隙を埋める貴重な訳業なのである。その点で驚くべきは、丑田弘氏によ

る「ルーオートリーブ」の邦訳が「ヴァルター」の歌」と「囚人の脱出」の邦訳とともに、朝日出版社から早くも一九九二年に刊行されていることである。この事実を昨年（二〇一三年）ヴァルター氏に直接お伝えしたところ、日本における中世ラテン文学研究の水準の高さに驚嘆しておられた。

物語は「高貴な家柄に生まれたさる勇士が、優れた人柄で貴族の出自に光を添えていた」という文章から始まるが、この勇士の名ルーオートリーブは断片十二に初めて現れる（主人公の名の初出は断片五の第二三行目などと思われるが、これは明らかに写学生による補筆である）。ルーオートリーブは数多くの有力な君主へ忠実に仕えたが、期待どおりの報酬をまったく得られなかった。そこで寡婦の母に財産を委ね、故郷を後にする決意を固める。旅の途中でルーオートリーブは、立派な大王に仕える狩人と出会う。友誼を結び、一

緒に大王の宮廷へ向かう。大王の家臣となったルーオートリーブは、牛の舌草を奪った魚を捕らえたり森の狼の視力を奪ったりする技を披露して、大王を驚かす。

大王が治める国は、長きにわたって隣国と友好関係にあった。しかし隣国の辺境伯が市場での騒動をきっかけに、大王の国へ攻め入る。大王から軍の指揮を任されたルーオートリーブは、敵軍を撃破して辺境伯を捕虜にする。しかしルーオートリーブは辺境伯の命を奪うことをせず、捕虜たちにも危害を加えない。都に戻ったルーオートリーブから戦勝報告を受けた大王は、捕虜たちを赦免して寛大に扱う。その後、ルーオートリーブは敗れた王（小主）のもとに使者として送られ、捕虜の釈放、賠償金の放棄、条約の締結といった大王からの提案を伝える。すると小主は大王の寛大な申し出に心から感謝し、二人の王の会見が三週間後に、先に両軍が戦った野原で行われることになる。

交渉の席では、敗れた王が大王に多くの贈り物を差し出すが、大王は昔のうまい双子の熊と、娘のためにカサカギとムクドリだけを受け取るにとどめる。こうして二国間で和平が締結される。大王の国に戻ったルーオートリーブは、母が送り出していた使者に出会い、母からの手紙を受け取る。それによると故郷にはもはやルーオートリーブの敵がいなくなつたため、早く戻ってきてほしいと綴られていた。大王は帰郷を望むルーオートリーブを送り出すことにするが、それまで十年間に及ぶ奉仕に対し、金貨やブローチの入った銀の器が入った二つのパンを用意させた。出立を前に、大王から財か知恵のいずれかを与えてほしいかと聞かれたルーオートリーブは、知恵のほうを選ぶ。そのときに大王が授けた十二の忠告の正しさは順に明らかになっていくが、断片で伝わる現存作品では四つの忠告だけが、ルーオートリーブにとって役立つことになる。

死期が迫ったルーオートリーブの母は夢で、二頭の雄猪を倒し、菩提樹の木の下に腰かけていた息子のもとに白い鳩が現れ、息子の頭に王冠をのせ、息子に口づけをする場面を見る。それは息子の輝かしい未来を告げる夢だった。母の死後、狩りに出かけたルーオートリーブは、洞窟の前で小人を捕らえる。小人は身柄の解放と引き換えに、二人の王が持つ宝のありかを教えるという。さらにルーオートリーブがこの二人の王を倒し、王の娘を手に入れることになると予言する。小人は自分の妻を人質に出すことにし、小人の妻が夫の解放をルーオートリーブに願いだしたところから作品は中断している。

祖国へ戻る途中、ルーオートリーブは赤毛の男に出会い、同行を求められる。その日の晩、赤毛の男は若い妻のいる老人の家で宿をとることにするが、若い妻と親密になった現場を老人に目撃される。その後、老人は赤毛の男と格闘になり、重傷を負ってまもなく亡くなる。赤毛の男と老人の妻は取り押さえられ、裁きが下される。妻は罪を認めて己に罰を課すことにするが、傲慢な態度を崩さない赤毛の男は死刑に処せられる。その間、ルーオートリーブは大王の忠告どおり、老いた妻のいる若者の家で歓待を受ける。

その後の旅の途上で、ルーオートリーブは甥に出会う。そして情婦との関係を断ち切れないでいた甥を説得し、一緒に祖国へ戻ることにする。その途中で二人は、寡婦の女主人とその娘が住む城で歓待される。その城でルーオートリーブがまたしても牛の舌草を使って魚を捕る技を披露したり、飼われていたムクドリが人間の言葉を話したり、

食事中に賢い犬が盗難事件を解決したりするといった面白いエピソードが続く。やがてルーオートリーブが堅牢の腕前を発揮すると、彼が奏でる曲にあわせて甥と女主人の娘が踊り始めて仲良くなる。このことを契機に二人は愛を育み、結婚に至る。

ようやく祖国に戻ったルーオートリーブは、一同との食事後、折よく母と二人きりになると、大王からもらったパンを切り分け、金貨がきつしり詰まった皿と、さまざまな宝石が満載の皿を見つけ、神と大王に感謝する。母から世継ぎを得るために結婚を勧められたルーオートリーブは、縁者と友人たちに来てもらい助言を求める。さまざまな土地に通じている男が、ある高貴な女性を花嫁候補として勧めたが、その女性がある僧と不倫関係にあることを知ったルーオートリーブは、求婚のため選んだ使者に不倫の証拠となる品々を持たせ、その縁談を終わらせてしまふ。

「ルーオートリーブ」は一九世紀末に校訂本を出したザイラーから「中世ヨーロッパで最古のロマン」と呼ばれ、その後も「騎士道物語」とみなされてきた。しかし作品の成立時期が二世紀後半であるなら、この評価は正確で

215

あつても接吻を交わす場面が何度も出てくる。このように「ルーオトリープ」は、骨組となるA T U九一〇B型の民話の周囲に、さまざまなジャンルの要素が付け加えられてできているのである。

作中に見られる新奇な要素もまた、「ルーオトリープ」の魅力の一つである。主人公が「牛の舌草」を使って行う魚釣り(断片二七)と釣り上げられた十八種類の魚の名(断片一七、大山猫の尿から作られる黄水晶(断片五)、人間の言葉をしゃべるムクドリ(断片十一)と十二、主人公が堅琴で奏でる曲(断片十二)などは、読者・聴衆を楽しませるだけでなく、教化的な意図をもった逸話を作り上げている。このことは、作者がブリニウスを始めとしたラテン作家の著作に通曉していたのであるとともに、作者が所属していたベネディクト会系のテューゲルンゼー修道院が、中世期の百科全書的な教養の拠点であったことも表している。

ここまで「ルーオトリープ」の獨創性を、トマ氏とヴァルテール氏が対訳版に寄せた長大な「序文」に従って紹介した。この対訳版には、「ルーオトリープ」、フランドル伯フィリップの「原本」と「グラアルの物語」と題された「後書き」も追加されており、十一世紀後半の作と推測される「ルーオトリープ」と、クレティアン・ド・トロワ作「グラアルの物語」(二一七九―二二八二年頃)との影響関係について詳しく検討されている。ちなみにクレティアンは「グラアルの物語」の序で、庇護者フランドル伯フィリップ(二一四三―一九一一年)から渡された「原本」を讀んで語ると宣言している。「ルーオトリープ」と「グラアルの物語」を詳しく比較検討すると、いずれも国際民話語型(A T U)の九一〇B型に属し、主人公がもう複数の忠告の正しさがその後の挿話群で順に例証されるという筋書きを共有していることが分かる(ルーオトリープは大王か

はない。なぜなら「ロマン」というジャンルは形式から見ると、ラテン語ではなくフランス語やドイツ語などの俗語で書かれた作品を指しているからである。一方で登場人物の特徴に注目すると、クレティアン・ド・トロワが著した物語の主人公たちに認められるように、「ロマン」では省察、感情、稟念といった主観性や個性が際立っている。これに対し、大王へ忠告を尽くし戦士団を率いて敵軍を撃破するルーオトリープは、共同体を具現する存在であり、「武勲詩」の主人公に近い。

トマ氏とヴァルテール氏が「序」で力説しているように、「ルーオトリープ」の主な典拠は、中世ヨーロッパの初期の文学作品に素材を提供していた聖書およびギリシア・ローマ文学という二大素材ではない。「ルーオトリープ」の骨格をなしているのは、フオークローアに属する口承起源の民話であり、一八八二年に校訂本を出したザイラーは「忠告の民話」がそれに相

当すると指摘した。民話の国際比較は今世紀に入って大きな進展を見せ、かつてアールネ(Aarne)とトンプソン(Thompson)が作成したウター(Dahlgren)が増補改訂した国際民話語型カタログ(A T U)では、九一〇B「主人の忠告を守る」が「ルーオトリープ」の骨格をなしていることが分かる。この話型の主人公は複数の忠告をもらった後、異なる場面ですれぞれの忠告を守って大団円を迎える。ルーオトリープはまさしく十年間仕えた大王から帰郷の直前に十二の忠告をもらうが、断片で残る現存作品にはそのうちの四つの忠告の正しさを例証するエピソードが見つか

民話が「ルーオトリープ」の骨格をなしている証拠に、作中には固有名詞がほとんど出てこない。主人公を温かく迎える主君は「王」、隣国の王は「別の王」と呼ばれ、大王が忠告の中で避けるべき存在として挙げる「赤毛の男」は、実際に断片五から登場する。

主人公の名ルーオトリープが明かされるのは断片十二になってからであり、それ以前には「異国の」狩人「正命者」「指揮官」「旗手」「使節」「騎士」などと呼ばれている。ルーオトリープが十年間滞在した大王の国は特定が困難な異界であり、これもまた「民話」の特徴である。

「ルーオトリープ」の核になっているのはA T U九一〇B型の「忠告の民話」であるが、その他にも副次的な典拠が散見される。故郷から出立するルーオトリープが首にかける「グリフィンの爪」の角笛(断片二)や、二人の王の宝の在処を知る小人(断片十八)は北欧のサガからの影響であろうし、ある僧と淫らな関係にあったルーオトリープの花嫁候補がその内実を暴かれる挿話(断片十七)は明らかにフアラリオ(韻文による笑話)から着想を得たものである。さらに作中には小貴族社会の実際の姿を思わせる描写が満載であり、知人が男性どうしで

フィリップ・ヴァルテール
渡邊浩司・渡邊裕美子 訳

ユーラシアの女性神話

ユーラシア神話試論II

A5判 278頁・定価2420円(税込)

▶ご注文は中央大学出版部まで

▶TEL(042)674-2351/FAX(042)674-2354

主として中世期の文献に登場する「女神」や女神的存在を、さまざまな実例とともにユーラシア神話の観点から分析した独創的な論文集。

中央評論 バックナンバー	
号数	特集タイトル
301	ヨーロッパ都市は今
302	フランスの魅力をつたたび
303	音楽の風景
304	「プラットフォーム」としての大学・学校
305	続・日本全国 B29 慰霊碑物語
306	あなたの知らない土の話
307	ことばの力
308	食と文化をめぐるエッセー
309	生き方論 冒険篇 —ユーザーズ・マニュアル—
310	日本人とテレビ
311	リアリティの哲学
312	卒業生に聞く「あなたにとって仕事とは」 —卒業十年後の証言—
313	ベトナム戦争と日本人
314	映画を考える
315	大学の授業 —その面白い出と理想をめぐる—
316	“民意”の測り方
317	読書について一冊を讀むか、どう讀むか
318	「外」から見た英語教育
319	コロナ禍の「孤立」と若者
320	DX時代の法学
321	イメージといかに向き合うか
322	恐怖を見積もる
323	流通・マーケティングの最前線
324	文と理の彼方
325	続・ベトナム戦争と日本人
326	映画の魅惑
327	多摩—その風土・歴史・文化
328	ネーミングとキャッチコピー

* 定価はいずれも330円(税込)です。
お求めの際は号数を確認のうえ、本学生協書
籍売場もしくは下記へご注文ください。
中央大学出版部営業 TEL: 042-674-2351



ら十二の忠告をもらい、ベルスヴァルは母、騎士ゴルヌマン・ド・ゴール、伯父の隠者から順に忠告を受ける。二作品の類似は骨組みとなる民話だけにとどまらず、主人公の名が選ばれせに明らかになるという構成も九一〇B型の民話では他に類例が見つからない。二人の主人公にはその他にも、貴族の生まれ、寡婦の息子、生来の才能、指南役との出会いといった数多くの共通点が見られるだけでなく、主人公がもらう複数の忠告の中にも関連がある。

クレティアンが庇護者ブランドル伯フィリップから授けられた「原本」はラテン語で書かれたATU九一〇B型に属する民話であったことは間違いないが、このタイプの民話が早くも一世紀にドイツ語圏で流布していたことを「ルーオトリープ」が証明してくれている。「ルーオトリープ」が断片でしか現存していないため断定はできないが、クレティアン・ド・トロワ作「グラアルの物語」との数多くの共通点は

偶然の一致とは到底思われない。少なくともブランドル伯がクレティアンに委ねたラテン語版の「原本」と、「ルーオトリープ」の作者に着想を与えたラテン語版が、いずれもATU九一〇B型「主人の教えを守る」に属する民話であったと考えるとよさそうである。

トマ氏とヴァルテール氏の対訳本の「参考文献」には、「ルーオトリープ」を対象にした研究のタイトルが相当数挙げられている。しかしその大半はドイツ語が英語で執筆されたものであり、フランス語で書かれた学術論文はモリス・ヴィルモット(一九一六年)とピーター・ドロンケ(一九六九年)が著した二点にとどまっている。本書の刊行を機に、フランス語圏での「ルーオトリープ」の再評価と本格的な研究の進展が期待される。

(経済学部教授 フランス語)

渡邊浩司 編著

幻想的存在の東西

古代から現代まで

妖術、巨人、こびと、悪鬼、怪物といった「幻想的存在」をユーラシア大陸の古今東西に求め、その諸相に学際的な視点から迫った論文集。

A5判 566頁・定価6710円(税込)

▶ご注文は中央大学出版部まで

▶TEL(042)674-2351/FAX(042)674-2354